



児童一人一人の言葉の力を育むための指導の工夫

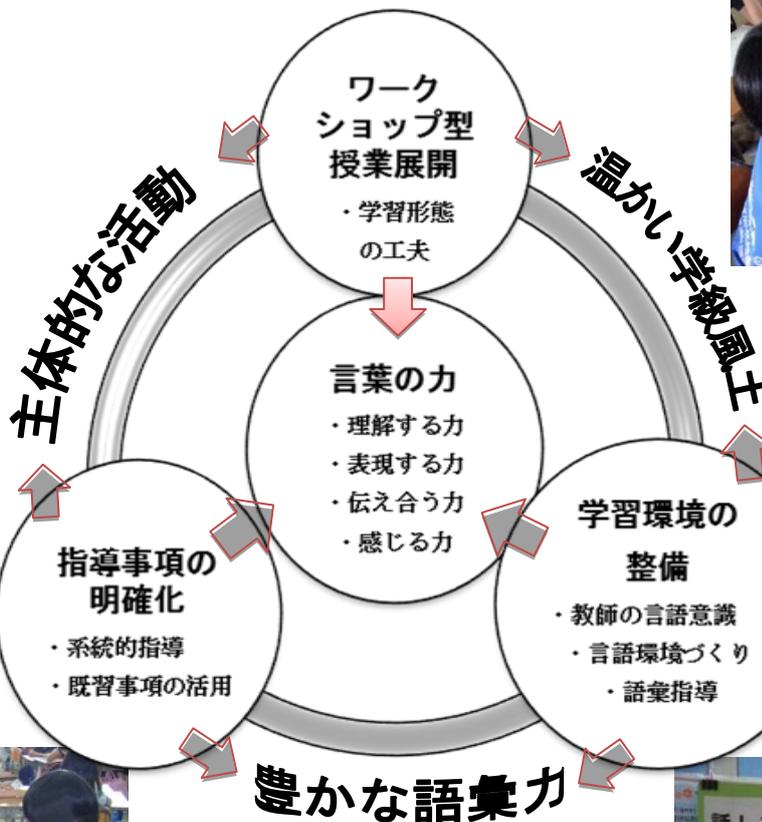
～「話すこと・聞くこと」におけるワークショップ型の授業展開を通して～

与那原町立与那原小学校教諭 城田モト子

1 研究テーマについて

「確かな学力」育成の基盤となる「言葉の力」を身につけさせるための指導について、これまでの実践を振り返ってみると、教師主導の授業展開が主で、児童が主体的に知識や技能を活用し、学習活動に取り組むための手だてが不十分であった。そこで、「話すこと・聞くこと」の領域において、ワークショップ型の授業を行うことは「言葉の力」を育むことに有効だと考え、本テーマを設定した。

2 研究の特徴



ワークショップ型の授業

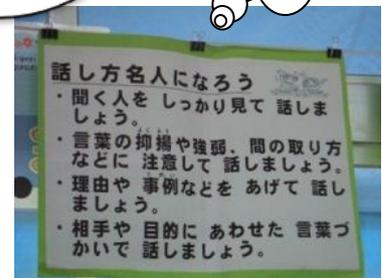
3 研究の実際



既習事項の活用



学習環境の整備



4 研究の成果

ワークショップ型の授業展開や指導事項を明確にした系統的指導を取り入れることで、主体的に学ぶ態度や相互に交流して学び合う態度が育ってきた。また、習得した「言葉の力」を活かして相互交流を行い、習得と活用を往還することで、児童一人一人の言葉に対する関心を高め、生きて働く「言葉の力」が効果的に培われていくことが分かった。

児童一人一人の言葉の力を育むための指導の工夫

～「話すこと・聞くこと」におけるワークショップ型の授業展開を通して～

与那原町立与那原小学校教諭 城田モト子

I テーマ設定の理由

人は、多くの人との関わりの中で生活している。その関わりを生み出し、つなぎ、深めていくための基本的な道具になるのが言葉であり、その関わりの土台となる一人一人の認識や思考、判断も、言葉の力を抜きにしては成り立たない。

しかし、昨今、少子化や核家族化等により、人間関係の希薄化やコミュニケーション不足、言葉遣いの乱れといった言語生活面での弱さが課題とされている。また、経済協力開発機構（OECD）の実施した国際的な学習到達度調査（PISA）の結果から「思考力・判断力・表現力」に課題があることも明らかになっている。

このような実態を背景に、今回の学習指導要領の改訂で、各教科・領域における「確かな学力」育成の重点ポイントとして特に言葉の力が強調され、言語活動の充実が取り入れられた。

平成22年度の本校の全国学力・学習状況調査を見ると、国語科「話すこと・聞くこと」領域のA問題では、全国平均と比べ、2.6%正答率が上回っている一方、B問題では-7.9%と顕著な落ち込みが見られる。「話すこと・聞くこと」に関して「聞き手が理解しやすいように、話の全体の構成を工夫すること」についての知識はあるが、「資料を効果的に提示して話すこと」、「目的や意図に応じて聞き手をひきつけるように話すこと」、「話の中心や話し手の意図をとらえながら聞き、適切に質問すること」等、活用場面での課題が見られた。

学級においても、自分の思いや考えをうまく表現することができず、級友とトラブルになったり、そのトラブルを解決するために話し合うことがうまくできない児童が多く見られる。それは、言葉の力が未熟で、適切な表現力・伝え合う力が身につけていないことや普段からのコミュニケーション不足を反映しているものと思われる。

また、これまでの私自身の授業実践を振り返ると、言葉の力を身に付けさせる具体的な指導が弱く、「発問」を中心とした教師主導の授業展開が主で、児童が主体的に知識や技能を活用し、学習活動に取り組むための手立てが十分でなかったと考えられる。

そこで、本研究では国語科の「話すこと・聞くこと」の領域において、①児童の実態を把握し、基礎的・基本的な指導事項を明確にした系統的指導②習得した力を活用できるワークショップ型の授業展開③言葉の力を育てる学習環境の整備、以上3点の研究を通して、学年相応の言葉の力を育てることができ、さらに、児童の主体的な学びの力を育むことにつながるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説と検証計画

1 研究仮説

国語科の「話すこと・聞くこと」の領域において、学習環境を整備し、次のような手立てを工夫すれば、児童一人一人の言葉の力を育むことができるであろう。

- (1) 基礎的・基本的な指導事項を明確にした系統的指導
- (2) 習得した力を活用できるワークショップ型の授業展開

2 検証計画

事前に言葉の力に関するアンケート及び事前テストによる学力調査を行い、児童の実態を把握する。その後、学習指導要領における基礎的・基本的な指導事項を明確にした上で、実態に応じた指導方法の工夫改善を図る。

3学年の「話すこと・聞くこと」の学習において、ワークショップ型の授業展開を通して検証授業を行い、ワークシートや自己評価、相互評価、教師の観察を分析し、ワークショップ型授業展開が言葉の力を育むことにつながっているのかを考察する。また、検証授業終了後に児童の変容を見るための事後調査(アンケート及び小テスト)を行い、本研究の有効性を検証する。

事前調査	<ul style="list-style-type: none"> ・調査内容：国語科「言葉の力」に関する調査 ・調査方法：アンケート，事前テスト(既習内容) ・調査時期：4月下旬 ・調査対象：与那原町立与那原小学校3年2組38人 			
単元名：5月単元「えらんだ理由を話そう」、7月単元「話を聞いてメモをとろう」 計6時間				
検証場面		検証の観点		検証の方法
検証授業	5月：「えらんだ理由を話そう」	単元導入	①基礎的・基本的な指導事項を明確にした系統的な授業実践は、児童の「言葉の力」を育むことができたか。 ②ワークショップ型授業において、習得した力を活用した相互交流ができたか。	<ul style="list-style-type: none"> ・観察 ・ワークシート ・発言 ・自己評価 ・相互評価
	7月：「話を聞いてメモをとろう」	単元まとめ		
事後調査	<ul style="list-style-type: none"> ・調査内容：国語科「言葉の力」に関する調査 ・調査方法：アンケート，事後テスト ・調査時期：7月下旬 ・調査対象：与那原町立与那原小学校3年2組38人 			
検証の視点				◎基礎的・基本的な指導事項を明確にし系統立て、ワークショップ型の授業展開を取り入れた学習指導の工夫は、児童一人一人の「言葉の力」を育むのに有効であったか。

III 研究内容

1 「言葉の力」について

(1) 「言葉の力」とは

学校や社会における生活は、言葉を遣って営まれている。人は、言葉を介して、自分の思いや考えを他者へ伝え、他者の思いや考えを理解する。言葉は、他者と対話し、コミュニケーションをとるための道具で、家族、友達、学校、社会において、人と人をつなぐ役割を担っている。

また、言葉は、思考力や感受性を支え、知的活動、感性・情緒、コミュニケーション能力の基盤となる。

2008年の中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善の基本方針」において、国語科を中心に育成すべき「言葉の力」を『①言葉を通して的確に**理解**する能力②論理的に思考し**表現**する能力③互いの立場や考えを尊重して言葉で**伝え合う**能力④我が国の言語文化に触れて育まれる**感性や情緒**』とし、その具体的な目標が示されている。

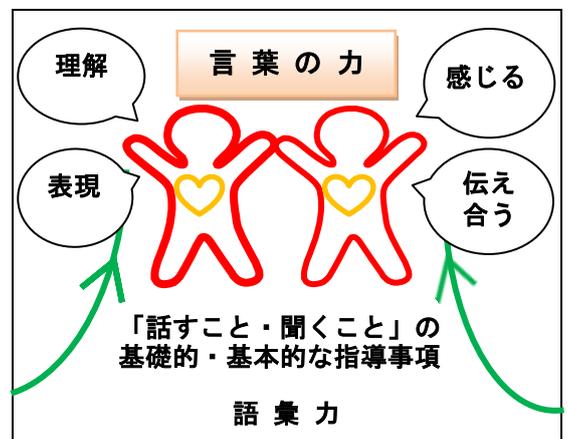


図1 「言葉の力」を育む道筋

そこで、本研究では、「言葉」の持つ役割を上記のように捉え、国語科で育成すべき「言葉の力」を、理解する力・表現する力・伝え合う力・感じる力とする。

さらに、児童の表現力や伝え合う力が不十分である実態やそれをうまく育むことができていない教師の課題により、「話すこと・聞くこと」の基礎的・基本的な指導事項とそれを支える語彙力の育成を道筋として「言葉の力」を育む指導方法(ワークショップ型授業展開)の工夫・改善を行う。本研究での「言葉の力」の捉えと、その道筋を表したのが図1である。

(2) 「言葉の力」を育むための学習環境の整備

「言葉の力」は、週7時間の国語の授業のみで育てるのは難しい。日常指導は勿論、他教科との関わりの中で言語活動を意識的に取り込んで定着を図ることが必須であるが、今回は下記のような場面で指導の工夫を行う。

① 既習事項を活用したエクササイズ(練習)

朝のドリル時間に、既習事項を活用したエクササイズを行う。具体的には、「話すこと・聞くこと」についての基礎的・基本的な知識および技能の掘り起こしを目的とし、系統的に2学年教材(言葉で絵を伝えよう、まよい犬をさがせ)を活用したエクササイズである。

また、知識や技能を活用する上で、重要な土台となる語彙力を高めることを目的とした言葉集めや言葉あそび(言葉のポケット、連想ゲーム、私はだあれ)、ことわざ音読(資料1)等も意図的に、エクササイズや授業の中に取り込んでいく。



資料1 ことわざ音読

② 教師の言語意識

児童は、1日の大半を学校・教室で過ごす。その日常の言語生活の場となる学校・教室で、教師の話す言語は、児童にとってもっとも身近な手本、範例として位置づけられる。言語環境の中心は教師自身であることを自覚し、意識的に学年相応の学習用語や豊かな語彙を用いた授業を展開しなくてはならない。

また、集団生活においては、学習上のルールや習慣によって育つ学級の言語体系も、児童一人一人の「言葉の力」を育む大きな基盤となる。そのために、国語の授業を中心に、日常会話においても意識的に児童に接し、言語環境を整えていきたい。そうした教師の日常の集団への指示や個々への言葉かけが、延いては、児童相互の言葉かけへと育っていくと考える。さらに居心地のよい言語環境は、児童の人権意識や思いやりのある言動へとつながり、集団の中で安心して話ができるようなよりよい人間関係、温かい学級風土を築くことにつながると考える。

③ 言語環境

良好なコミュニケーションを図るためには、思いや考えを表現するための語彙を豊かにし、表現力を身に付けることが重要である。そこで、豊かな語彙を身に付けるための一つとして、言葉に対する関心を深めたり、言葉の正しさや美しさ、リズム等を体感できる言語感覚を育んだりする上で、多くの言葉に触れる環境づくりを進めていく。

国語の時間や他教科の学習時、日常会話の中で役立つ言葉に関する掲示物(声のものさし、発表時の話形、国語学習のための用語集、原稿用紙の書き方、推薦図書、言葉の図鑑、新聞記事等)を提示する。また、本の読み聞かせや紹介、身の回りの事象を掲載している新聞記事等を教材化し活用する等、多様な場面や状況における言葉の学びを広げ、言葉に触れる機会を増やしていく。

2 「話すこと・聞くこと」について

(1) 「話すこと・聞くこと」とは

「話すこと」は自分の思いや考えを持ち、それを表現することであり、「聞くこと」は、相手の思いや考えを受け止め、理解することである。そして、「話し合うこと」は、お互いの思いや考えを伝え、共通点や相違点を認め合い、受け止め、お互いに納得する方向へ話を進めることである。

これは、先の「言葉の力」とは述べた「言葉の力」そのものであり、「話すこと・聞くこと」は、まさに言葉の力に直接結びつく言語活動である。よって、言葉の力を育むことは、「話すこと・聞くこと」の能力を育成することが出発点と言える。

「話すこと・聞くこと」の学習では、知識・技能が習得と同時に、活用され、また活用の場面を通して習得されるという相互作用が、連続的かつ同時的に働くことも特徴的である。

(2) 学習指導要領における国語科の目標及び「話すこと・聞くこと」の内容

① 国語科の目標「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」

② 「話すこと・聞くこと」の目標及び内容の系統表

	低 学 年	中 学 年	高 学 年
目 標	相手に応じ、 <u>身近なこと</u> などについて、 <u>事柄の順序を考えた</u> ながら話す能力、 <u>大事なことを落とさないように聞く</u> 能力、 <u>話題に沿って話し合う</u> 能力を身に付けさせるとともに、進んで話したり、聞いたりしようとする態度を育てる。	相手や目的に応じ、 <u>調べたこと</u> などについて、 <u>筋道を立てて話す</u> 能力、 <u>話の中心に気を付けて聞く</u> 能力、 <u>進行に沿って話し合う</u> 能力を身に付けさせるとともに、工夫をしながら話したり聞いたりしようとする態度を育てる。	目的や意図に応じ、 <u>考えたこと</u> や <u>伝えたいこと</u> などについて、 <u>的確に話す</u> 能力、 <u>相手の意図をつかみながら聞く</u> 能力、 <u>計画的に話し合う</u> 能力を身に付けさせるとともに、適切に話したり聞いたりしようとする態度を育てる。
指 導	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>身近なことや経験したこと</u>などから話題を決め、必要な事柄を思い出す。 ・相手に応じて、<u>話す事柄を順序立て</u>、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>関心のあること</u>などから話題を決め、必要な事柄について調べ、要点をメモする。 ・相手や目的に応じて、<u>理由や事例を挙げながら筋道を立て</u>、丁寧な言葉を用いるなど適切な言葉遣いで話す 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>考えたこと</u>や<u>伝えたいこと</u>など話題を決め、収集した知識や情報を関係付ける。 ・目的や意図に応じて、<u>事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら</u>、場に応じた適切な言葉遣いで話す。
事 項	<ul style="list-style-type: none"> ・姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して、はっきりした発音で話す。 ・<u>大事なことを落とさないように</u>しながら、興味をもって聞く。 ・互いの話を集中して聞き、<u>話題に沿って</u>話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手を見たり、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意したりして話す。 ・<u>話の中心に気を付けて聞き</u>、質問をしたり感想を述べたりする。 ・互いの考えの共通点や相違点を考え、司会や提案などの役割を果たしながら、<u>進行に沿って</u>話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・共通語と方言との違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話す。 ・<u>話し手の意図をとらえながら</u>聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめる ・互いの立場や意図をはっきりさせながら、<u>計画的に</u>話し合う。

(3) 「話すこと・聞くこと」において基盤となる言語技能の系統

下記の表1・2・3は、平成21年の「東京都港区立青南小学校研究紀要」を参考に、「話すこと・聞くこと」において基盤となる言語技能の系統を、「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」に関する指導事項別にまとめたものである。児童に身に付けさせたい基礎的・基本的言語技能の目標として活用していきたい。(―は重点的取り扱い学年、……は関連学年を示す)

表1 「話すこと」に関する言語技能

【話すこと】 言語技能		幼	小		中
			低	中	高
1	必要な事柄を考える		―	……	
2	事柄の順序を考える		―	―	
3	姿勢や口形に注意する	……	―	―	……
4	はっきりした発音で話す	……	―	―	……
5	筋道を立てる			―	
6	適切な言葉遣いで話す		……	―	……
7	相手を見る	……	―	―	……
8	抑揚、強弱、間のとりに方に注意する			―	……
9	図表や絵、写真等を活用する			―	……
10	理由や事例等を挙げる			―	……
11	語尾まではっきり話す	……	―	―	……
12	話の構成を工夫する				―
13	要旨を明確にする				―
14	事象と感想・意見とを区別する				―
15	必要に応じて共通語を遣う				……
16	資料を活用して説明や報告する				―

表2 「聞くこと」に関する言語技能

【聞くこと】 言語技能		幼	小		中
			低	中	高
1	最後まで集中する	……	―	―	……
2	話し手を見る	……	―	―	……
3	分からないことを尋ねる		……	―	……
4	大事なことを落とさない		―	―	……
5	話の中心に気を付ける			―	……
6	話の組み立て方を意識する			―	……
7	さらに情報を得ようとする		……	―	……
8	聞いた内容をメモにとる		……	―	……
9	確認や質問をする			―	……
10	話し手の意図をとらえる				―
11	自分の意見と比べる			……	―
12	話の要旨を考えながら聞く			……	……
13	主張と根拠の関係を考える				―
14	論理の展開を考える				―
15	話し手の立場を考える				……
16	目的を自覚して聞く				……
17	自分の情報との関連を考える				……

表3 「話し合うこと」に関する言語技能

【話し合うこと】 言語技能		幼	小		中
			低	中	高
1	話題に沿う		―	……	
2	尋ねたり、応答したりする		―	……	……
3	グループで意見を一つにまとめる		―	……	……
4	説明や報告等話を聞いて、感想を述べる		―	……	
5	互いの考えの共通点や相違点を考える	……	―	……	……
6	司会や提案などの役割を果たす			―	……
7	進行に沿う			―	……
8	説明や報告を聞き、意見を述べる			―	……
9	学級全体で考えをまとめたり、意見を述べ合ったりする	……	―	……	
10	互いの立場や意図をはっきりさせる				―
11	計画的に話し合う				―
12	資料を提示し説明や報告をしたり、それらを聞いて助言や提案をしたりする				―
13	調べたことやまとめたことを討論する				―

3 ワークショップ型授業について

(1) ワークショップ型授業とは

外国語(英語)活動では、そのほとんどがワークショップ型の授業展開で進められ、児童が生き生きと学ぶことを楽しみ、その時間に習得した知識や技能を活用し、対話をしながら相互交流している姿を見ることが出来る。戸惑いながらも、試行錯誤を繰り返しチャレンジしていく姿は、まさに主体的に学ぶ姿である。

上條(2004)の『ワークショップ型授業で国語が変わる』によるとワークショップ型授業とは、「自由感のある『活動』を通して学ぶことで、関心・意欲・態度を基礎とした主体的な学びの力を育てる」と定義している。

また、「ワークショップ型授業は(図2で示されるように、授業の大半が活動の時間となる)『活動中心の授業』であり、『自由感のある活動』を通して学ぶことによって、子ども達の中に『本当に分かる』『腑に落ちる』という『感情を伴った知的気づき』が生まれる」と上條は言う。つまり、児童にとって、生活場面での経験や感性と言葉が直接つながったときこそ、初めて、言葉は生きて働く「言葉の力」として発揮されていくのである。

ワークショップ型授業では、児童の主体的な活動(自由感)を確保し、活動のルール の範囲内で、自分なりの「試行錯誤」を繰り返す。ワークショップ型授業では、そうした活動の試行錯誤、活動の過程を重視する。そして、その試行錯誤の「思考の跡」を取り出して、ふり返りの活動をする。体験的な学びを言葉にすることによって、「学習化」を図るのである。

(2) なぜワークショップ型授業なのか

「言葉の力」は、多くの人との関わりの中で、実際に言葉を遣う経験を重ねることで、身につけていく。しかし、私のこれまでの教師主導型「説明中心、発問中心」の授業実践では、児童に言葉を遣う経験を重ねさせることが難しかった。そこで、児童が自ら思考し、活動ができる「活動中心、児童主体」の授業展開であるワークショップ型授業では、「コミュニケーション」の領域にある「話す能力・聞く能力」を育てるのに、効果は大きいと考えた。

また、身についた力を応用していく上でも、実際に「話す・聞く」活動を行う中で、児童自身が「試行錯誤」し、その「ふり返り」をするために、実生活での適応力が大きくなり、様々な場面で生きて働く「言葉の力」につながると考える。

(3) ワークショップ型授業による効果

2008年に文部科学省が実施した「全国学力・学習状況調査」の結果によると、「家の人と学校での出来事について話をしている児童の方が、正答率が高い傾向が見られる。」という。この興味深いデータの報告について、安野(2009)は、「子どもは、日々の様々な対話を通じて、人間的に大きな成長を遂げていくはずだ。それと同時に、学力の基礎となる『言葉の力』も知らず知らずのうちに身に付けていくのではないか。」という仮説を述べている。勿論、様々な要因が複雑に絡み合っている上での結果であろうが、「家族との対話によって育まれた『言葉の力』」も大きな要因の一つとして考えられるだろう。

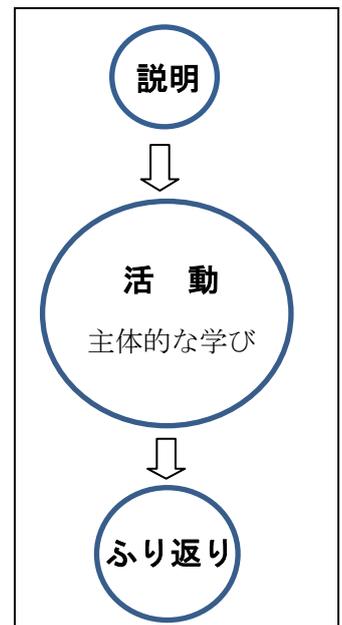


図2 ワークショップ型授業モデル

そう考えると、一人一人の発言機会が多くなり、対話しながら自分の考えを整理しまとめることができ、他者のよい考えに触れたりそれを受け入れたりする状況が生まれ、さらには、相手の考えを引き出したり相互に新たなアイデアが生まれたりするワークショップ型授業の効果は大きい。

ワークショップの過程で、他者とのコミュニケーションや、自分が受け入れられたり、新しい価値に触れたりするプロセスを楽しむこともでき、それが、教室内のコミュニケーションの充実につながり、集団としての学習力をも高めていけるのではないかと考える。

また、上條のワークショップ型授業の定義によると、「自由感のある活動を通して学ぶことで、関心・意欲・態度を基礎とした主体的な学びの力を育てる。」とある。児童が「自ら学び自ら考える」授業、「感情を伴った知的気づき」のある授業、ワークショップ型授業による効果は学力形成のベースの育成にも期待できる。

(4) ワークショップ型を取り入れた授業展開

表4は、先に示した図2 ワークショップ型授業モデルの基本的な進め方の例をまとめたものである。検証授業はこの基本の流れで行い、活動時の学習形態を、個から少人数へ、少人数から全体へとした。自分の考えをしっかりと持った上で、二人で対話する活動を行い、さらに全体で交流する。「言葉の力」を育てる上で効果的な流れと考える。

表4 ワークショップ型授業の基本的な進め方の例

児童の主な活動	教師の活動
説明 (導入)	
① ウォーミングアップ 楽しいミニエクササイズ (既習事項の活用, 漢字やことわざ音読等) ② 本時の活動のねらい・手順・約束の確認 ③ 質問タイム	○雰囲気づくり ○活動に消極的な児童への配慮 ○簡潔・明瞭な説明(説明用シートやモデルの活用)
活動 (展開)	
① 個の活動 <u>自分の考えを持つ, 試しの活動</u> : 既習事項やこれまでの自分の体験を生かして思考, 活動し, 自分なりの考えを明確にする。 ② 少人数で活動 <u>少人数の友達と考えを交流する</u> : 一人一人の発言機会, 話し聞く活動が確保され, 回数を重ねるごとに, 相手へ伝える方法や手順等を試行錯誤する中から, 感覚的に感じる事ができる。 ③ 全体で活動 <u>交流する</u> : 全体で交流すると多くの聞き手を意識した話し方になる。一度少人数の中で意見を述べているので, 自分の考えをより明確にして話すことができる。また, 聞き手もより多くの考えにふれることができ, 自分の考えを深めることができる。	○活動できない児童の確認・対応・言葉かけ ○楽しい雰囲気づくり ○失敗を許容・試行錯誤を見守る ○ルールが守られているかの確認 ○相互交流の見守りと援助 ○発表者への称賛
ふり返り (まとめ)	
① 体験を言葉にする 活動によって「気づいたり考えたりしたこと」について, 各学習者が言葉にする。体験に基づいた感情を伴った「わかる」の確認作業。	○児童の自主性や気づきを尊重 ○本時の活動ぶりや個々のよさを称賛

4 第3学年「話すこと・聞くこと」におけるワークショップの例

これまで取り組んできたワークショップ型の授業をふり返り、第3学年「話すこと・聞くこと」における指導内容と身に付けるべき「言葉の力」、有効と思われるワークショップの例を取り上げ、一覧表を作成した。(表5)

表5 指導内容と言葉の力、ワークショップの例

	学習指導要領における指導内容	身に付けるべき「言葉の力」	ワークショップの例
話題設定や取材	ア 関心のあることなどから話題を決め、必要な事柄について調べ、要点をメモすること。	○身近なことや経験した事柄から話題を決め、発表のための要点メモを作る。 ○相手と目的に応じた話題を選ぶ。	「話したいな、夏休みの出来事」 : 相手や目的に応じて事実を伝えるために必要な事柄を集めて選ぶ。
話すこと	イ 相手や目的に応じて理由や事例などを挙げながら筋道を立て、丁寧な言葉を用いるなど適切な言葉遣いで話すこと。 ウ 相手を見たり、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意したりして話すこと。	○相手に用件が伝わるように、順序よく筋道を立てて話す。 ○相手や場を意識して、適切な言葉遣いで話す。 ○相手や状況に応じて、適切な音量や速さ、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに気を付けて話す。 ○理由や事例などを挙げながら話す。 ○内容に合わせて、実物または絵・写真・図表などの資料を活用して話す。	「テレパシーゲーム」 : 簡単な絵や形を相手に言葉で伝える。 「コロコロトークング」 : サイコロをふって、テーマを決め、ミニスピーチをする。 「おとなりさんを紹介します」 : ペアをつくり相手のことをみんなに紹介する。 「今年の漢字はこれ！」 : 選んだものやその理由について話しをする。 「聞いて！わたしの宝物」 : 宝物を実物や資料を使って紹介する。
聞くこと	エ 話の中心に気を付けて聞き、質問をしたり感想を述べたりすること。	○集中して最後まで聞く。 ○中心に気を付けて聞く。 ○相違点や共通点を意識して聞く。 ○要点をメモしながら聞く。 ○分からないことは聞き返す。	「伝言ゲーム」 : メモをとりながら話を聞き、次の人へ正確に伝える。 「質問リレー！30秒」 : 相手が思い浮かべている物を質問をして当てる。
話し合うこと	オ 互いの考えの共通点や相違点を考え、司会や提案などの役割を果たしながら進行に沿って話し合うこと。	○互いの考えの共通点や相違点を考えながら話し合う。 ○司会や提案などの役割を果たす。 ○進行に沿って話し合う。 ○出来事の説明や調査の報告をしたり、それらを聞いて意見を述べたりする。 ○学級全体で話し合っただけ考えをまとめたり、意見を述べ合ったりする。	「話し合っただけよう～学級紹介のパンフレットを作ろう～」 : 自分の学級を紹介するためのパンフレット作りについて話し合う。 「無人島へレッツゴー！」 : 無人島へ持っていく3つの物を何にするか話し合う。 「新聞の写真を使って！」 : 図表や絵、写真などから読み取ったことを基に話し合う。

IV 授業実践

1 検証授業の実際

回	月 日	校 時	検 証 項 目	検 証 方 法
1	5月24日(火)	5校時	①基礎的・基本的な指導事項を系統立てた授業は、児童の「言葉の力」を育むことができたか。	・観察 ・ワークシート ・発言
2	5月26日(木)	5校時		
3	5月31日(火)	4校時		
4	7月5日(火)	5校時	②ワークショップ型授業において、習得した力を活用した相互交流ができたか。	・自己評価 ・相互評価
5	7月8日(金)	3校時		
6	7月11日(月)	1校時		

2 検証授業本時の指導(7月の実践から)

(1) 単元名 話を聞いてメモをとろう

(2) 単元設定の理由

- ① 教材観(省略)
- ② 児童観(省略)
- ③ 指導観

本教材では、目的を持った聞き方を学ぶことをねらいとしている。2学年で大事なことを短い言葉で書く、分からなかったことは聞き返すといった基本原則を学

んでいる。それをふまえて、本教材では、話の中にあるいくつかのまとまりを聞き分けて見出しを付けたり、大事な言葉に着目して聞き取ったりする学習をする。これが、4学年6月「メモの取り方を工夫して聞こう」では、話の中の因果関係等を聞き取って、工夫したメモを書く学習へとつながっていく。

また、単元導入時とまとめ時に、ワークショップ型の授業展開を取り入れ、具体的な場面設定の中で活動中心の学習を行う。その活動を通して得た知識や技能をふり返りの学習の中で言語化することで、言葉の力(メモの取り方についての留意点)へとつなげていきたい。

(3) 単元の指導目標

- ① 単元の目標 話の大事なことを聞き取って、メモを取る。(話すこと・聞くこと エ)
- ② 観点別評価規準(◎は重点的に扱うものを示す。)

○話の中の大事なところはどこかを意識して聞くことに意欲的に取り組もうとしている。

【関心・意欲・態度】

◎話の中から大事なことを聞き分けて、大事なことを短い言葉でメモに取ったりしている。

【話すこと・聞くこと】

○聞いた話の中で分からない点や確かめたい点を質問している。

【話すこと・聞くこと】



資料2 話を聞いてメモをとる児童

(4) 指導計画と評価計画

次	時	学習計画	評価規準【観点】 (評価方法)	A十分満足できる	C 努力を要する 個への指導の手だて
		・事前テスト ・エクササイズ（2学年の教材から）			
一	1 本 時	○話を正確に聞き取るためのメモの取り方を理解しようとしている。	・話の中から大事なことを聞き分けてメモを取ることに興味を持ち、聞くときのメモの取り方について理解しようとしている。 【関】(発言・観察・ワークシート)	・メモの取り方に興味を持ち、例文を聞きながらメモをしたり、友達と読み比べたりして、意欲的に取り組んでいる。	・話を聞くときにどんなことに気を付けたらよかったか問いかけ、エクササイズを思い起こさせ、興味や関心を高めさせる
	2	○話の内容をより詳しく知るために、どんな質問をしたらよいかを考える。	・話を聞きながら取ったメモをもとに、分からないことや確かめたいことを質問している。 【話聞】(行動観察・ワークシート)	・メモを取りながら話を聞き、分からないことや確かめたいことを質問することができる。	・聞いた話で、分からないことや確かめたいことがないか、その場面の様子を思い浮かべながら聞くようにさせる。
二	3	○大事なことを聞き取ってメモを取ったり、質問を考えたりする。	・話の中から大事なことを聞き分け、箇条書きや番号を使って書いたり、大事なことを短い言葉でメモに取ったりしている。 【話聞】(行動観察・ワークシート)	・要点を正しく聞き取り、メモしたり分からないことや確かめたいことを質問したりすることができる。	・メモの取り方についての留意点(言葉の力)と、前時までの学習をふり返らせ、メモの書き方を具体的にイメージさせる。
		・事後テスト			

(5) 本時の学習（1／3時）

① 本時のねらい

話を正確に聞き取るためのメモの取り方を理解しようとしている。(聞くこと エ)

② 本時の授業仮説

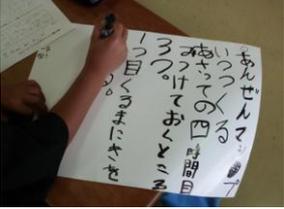
ア ワークショップ型の授業展開を取り入れることで、児童一人一人の思考が主体的になり、試行錯誤の中から、話を正確に聞き取るためのメモの取り方について気づくことができるであろう。

イ 活動の中から気づいた留意点についてふり返り、相互交流することで「言葉の力」(メモの取り方についての留意点)をまとめることができるであろう。

③ 準備

ことわざフラッシュカード、学習の流れ説明シート、ワークシート①②、画用紙(裏面磁石付)20枚、マジック20本、ワークシート拡大図、ビデオカメラ

④ 本時の展開 (1 / 3時)

過程	学習の流れ	教師の支援と留意点	■授業仮説検証の視点 ◇評価方法・準備
説明 (導入)	1 フラッシュカードで「ことわざ」を音読する。 2 本時のめあてと学習の流れを知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center;">話を正確に聞き取るためのメモの取り方を考えよう。</div>	○言葉の抑揚や強弱、間の取り方を意識させながら、楽しい雰囲気、ウォーミングアップの活動を行い、意欲を喚起する。 ○既習のメモの取り方を確認した後、本時のめあてと学習の流れを説明する。	・ことわざフラッシュカード ・既習の「言葉の力」掲示資料 ・ワークシート① ・学習の流れ説明用資料
活動 (展開)	3 「話を聞いてメモを取る」試しの活動を行う。  4 それぞれのメモをもとに隣どうして読み合い、見直し、例文の「大事なこと」を画用紙にまとめる。 5 画用紙に書いたメモを持ちより話し合う。  	○教科書の例文を聞きながら、メモを取らせる。 ○細かい指示をせず、児童が大事だと思うところを各々メモさせる。 ○例文を読む際は、全体的に速度を落とし、「どんなもの」「いつ」「見つけておくところ」を強調し、児童のメモの様子も確認しながら読むように配慮する。 ○児童のメモが十分とれていない場合は、試しの活動を2回行う。 ○ペアでメモを読み合い、見直し、修正を入れて「大事なこと」を画用紙に書かせる。 ○「大事なこと」が、抜けていたり、余計なことが入っていたりしていないか、正確に聞き取るためのメモの取り方について話し合う。(本時のめあてを再度確認する) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 安全マップ作り ○どんなもの 安全に通学するために気を付けるところを地図に書きこんだもの。 ○いつ あさっての4時間目 ○見つけておくところ 1 車に気を付けるところ 2 さびしいところ 3 たすけてくれそうな家や店 </div> ○画用紙のメモ18枚を黒板に提示し、正確に聞き取るためのメモの取り方について話し合う。 ○貼り出された18枚のメモを見ながら、 ・聞いたことを羅列しているだけのメモ ・箇条書きのメモ ・ナンバリングしてあるメモ ・見出し付けしてあるメモ 等に、グルーピングして、より正確に聞き取るためのメモの取り方に気づかせる。	■検証① 児童なりの考えで、(間違いも含めた)メモができているか。 ・画用紙・マジック   ■検証② 活動の中から気づいたことについてふり返り、相互交流することで「言葉の力」(メモの取り方についての留意点)をまとめることができたか。
ふり返り (まとめ)	6 「話を正確に聞き取るためのメモの取り方」についてふり返る。 7 次時予告	○ワークシート②で、教科書からのメモ例を確認した後、言葉の力(メモの取り方)についてふり返る。	・ワークシート② ◇話の中から大事なことを聞き分けてメモを取ることに興味を持ち、聞くときのメモの取り方について理解しようとしている。

3 授業仮説の検証

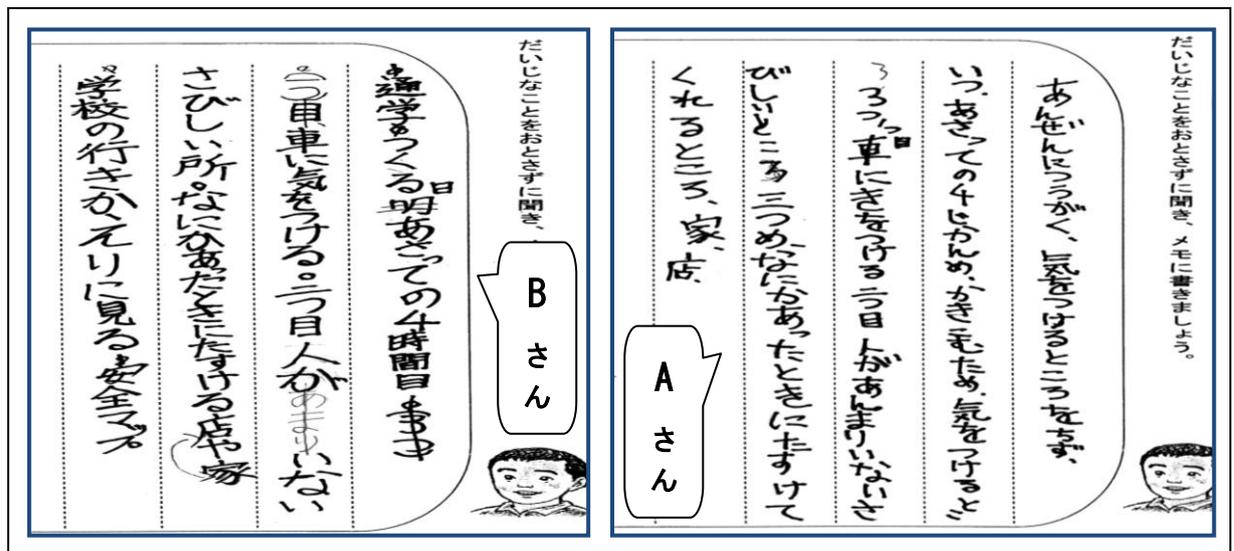
本時の授業仮説について、自作ワークシートの記述や児童の自己評価・相互評価、観察者から見た学級全体の評価を基に考察する。

表6 観察者から見た評価の観点と基準

観 点	評 価 基 準				評価方法
	A	B	C	D	
	十分満足できる	概ね満足できる	やや努力が必要	努力を要する	
(1) 児童なりの考えで、(間違いも含めた)メモができたか。	既習事項を活用し、児童なりの工夫あるメモ。	既習事項を活用したメモ。	聞いたままの例文を書き写したメモ。	ほとんどメモができていない。	ワークシート 観察 自己評価
	8人：21%	19人：50%	10人：26%	1人：3%	
(2) 相互交流することで「言葉の力」(メモの取り方についての留意点)をまとめることができたか。	メモの取り方の留意点について自分の言葉でまとめることができる。	メモの取り方の留意点の一部を自分の言葉でまとめることができる。	メモの取り方の留意点を友達の言葉でまとめることができる。	メモの取り方の留意点をまとめることができない。	ワークシート 観察 自己評価 相互評価 発言
	6人：16%	18人：47%	14人：37%	0人	

(1) 「児童なりの考えで、(間違いも含めた)メモができていないか。」について

表6の観察者から見た評価によると、自分なりの工夫をしながらメモをとれた児童が21%、「短く書く」という既習事項を活用してメモをとれた児童が50%と、B評価以上が71%を示した。これは、本単元第1時の導入部分の試しの活動での結果であるが、ワークショップ型授業展開を取り入れたことで、児童の思考が主体的になり、児童のこれまでの経験や既習事項を活用した試行錯誤の中でメモを取れたことが、資料3の試し活動のメモからも分かる。また、26%を占めた話を聞いたまま書き写すメモや1文～3文程度のメモしかできていない児童に関しても、主体的に活動し、児童なりに考え、試しの活動に参加している。これは、教師主導で、これまでの経験を想起させる形の導入では、見られなかった姿であり、「実際に言葉を受け止め、児童一人一人が思考を働かせ試行錯誤しながらメモに書く」という体験ができるワークショップ型授業ならではのよさだと思われる。その後、C評価以下の児童も「なぜ、うまくメモができなかったのか」を、相互交流をしていく中で正確に聞き取るためのメモの取り方に気づいていった。



資料3 試行錯誤の跡が見える児童のメモ

(2) 「活動の中から気づいたことについてふり返り、相互交流することで『言葉の力』（メモの取り方についての留意点）をまとめることができたか。」について

ペアでの交流や全体交流の中での児童の発言やワークシート等から取り上げてみると、メモの取り方の留意点に気づき言葉でまとめることができた表6(2)のB評価以上の児童は63%であった。一方、自分なりの言葉でまとめることができなかった37%の児童は、相互交流した後の気づきを各自で言語化する活動を十分にとれず、全体でまとめる活動を行ったことによるものである。教師の周到な準備と大きな枠組みの中で、児童の発想を受け止め、活動を見取る力、ワークショップ型活動を進める技術の向上を今後の課題としたい。



資料4 全体交流の場面

V 研究の結果と考察

研究の考察は、授業観察や児童のワークシートと自己評価・相互評価、事前・事後のテスト結果を基に行った。

1 基礎的・基本的な指導事項を明確にした系統的指導実践は、児童の「言葉の力」を育むことができたか。

(1) 児童の事前・事後テスト、ワークシートから

「話すこと・聞くこと」の領域において、指導事項を明確にし、系統を意識しながら授業実践やエクササイズ等の指導実践を行った。その有効性を、中学年の指導事項である「理由を挙げて話す能力」「話の中心に気を付けてメモをしながら聞く能力」について、事前・事後テストの結果、児童のワークシートを基に検証した。

① 図3は、理由を挙げて話す能力において、事前・事後のテスト結果を比較したものである。その結果、事後テストにおいて理由をいくつか挙げ、順序だてて話せるA:十分満足が21%から45%に増え、理由を挙げられないC:努力を要する児童は0%となり、どの児童もその学習の中で習得すべき「言葉の力」を身に付け、活用して話す能力がついたと言える。

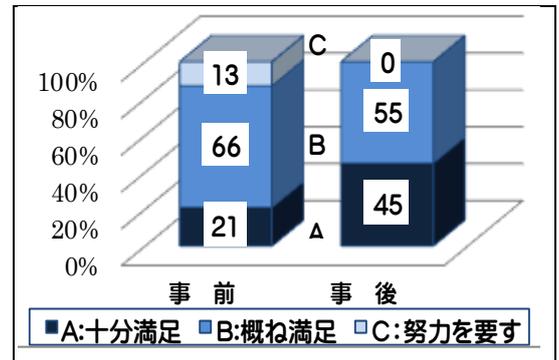
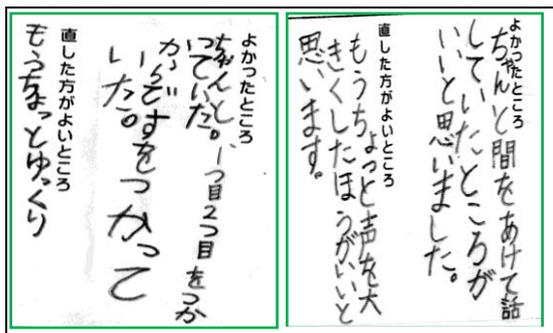
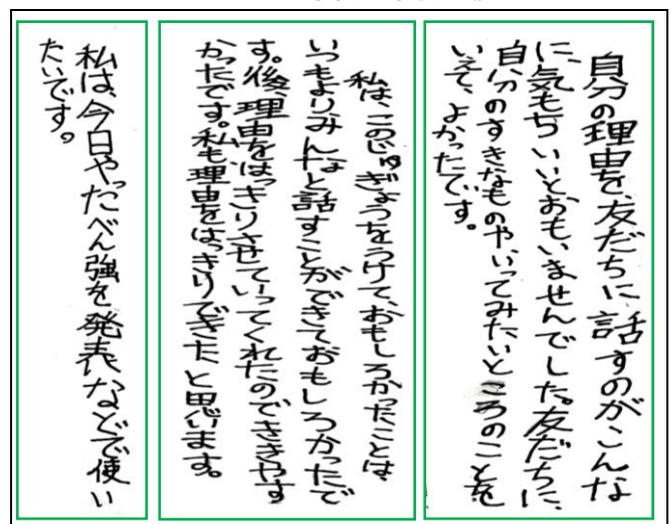


図3 理由を挙げて話す能力 事前・事後比較

資料5は、理由を挙げて話すワークショップ型授業で行ったペアでの相互評価カードである。児童が、学習した「言葉の力」や言語技能を意識しながら交流している様子が分かる。資料6の授業後の感想からは、友達と交流し話す楽しさに気づき、さらに習得した事を活用する意欲へとつながっていることが分かる。



資料5 相互評価カード



資料6 「理由を挙げて話す」授業後の感想

① 言葉あつめ：言葉のポケット

資料14は、平成21年の「東京都港区立青南小学校研究紀要」の実践を参考にした言葉あつめの実践である。児童がよく遣う言葉を○で囲んだ後、自分で見つけた言葉を書き込む活動であるが、できるだけたくさんの言葉をポケットに詰め込みたいと、言葉に対する関心が高まり、児童の主体性を育むのに大いに有効であった。

② 言葉あそび：鉛筆連想ゲーム

資料15は、言葉から広がるイメージを膨らませたり、そのイメージに合う言葉を見つける活動を通して、語彙を増やし豊かにしていくことをねらいとした鉛筆連想ゲームのワークシートである。児童は回を追うごとに、想像を広げ、喜んで取り組んでいった。また、2人1組で交互に書いていくので、自分の書いた言葉から、友達が何をイメージし、どんな言葉を書き込んでくるのかも、児童の意欲を喚起したようである。(資料16)

資料14 言葉のポケット

資料15 鉛筆連想ゲーム

言葉のポケットや言葉あそびは、おもしろかったです。
 その中で、1番おもしろかったことは、えんぴつ
 フレンソウゲームです。
 とんりの人の書いたものを見て思いつくものを
 書くものだったので、なうぞうすることができると
 うになったのでうれしかったです。
 これからは、もっとそうぞうがができるようになり
 たいです。

資料16 言葉あつめ・言葉あそびの感想

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 基礎的・基本的な指導事項を明確にした系統的・段階的な指導実践は、児童の「言葉の力」話す能力・聞く能力を育むのに有効であった。(V-1)
- (2) 習得した力を活用するワークショップ型の授業展開は、児童の主体的な活動を生み、繰り返し相互交流していく中で効果的に「言葉の力」も培われていくことが分かった。(V-2)
- (3) 「言葉の力」を育む学習環境を整備することにより、言葉に関心をもち、主体的に言葉を増やそうと学ぶ姿が見られるようになった。(V-3)

2 今後の課題

- (1) ワークショップ型授業におけるファシリテーション能力の向上。(IV-3)
- (2) 習得した「言葉の力」が、「確かな学力」の基盤として活用できる日々の継続的な実践。

(III-1~3)

〈主な参考文献〉

甲斐睦朗/興水かおり 編集	『言語力を育成する学校』	教育開発研究所	2009年
上條晴夫 編著	『ワークショップ型授業で国語が変わる』	図書文化社	2009年
安野 功 著	『ことばの力が育つ対話型学級経営』	日本標準	2009年
山本直子 編著	『対話力アップワーク』	明治図書	2006年